印度學佛教學研究第四十二巻第二号　平成六年三月

円測唯識学における『成唯識論』の資料的問題

橘　川　智　昭

一

円測（613-696）の唯識学は、道証や太賢、又敦煌地方では曇曠などに継承され、ある時期において慈恩系とは異なる学系を形成したようである。円測が撰述した『成唯識論疏』は現存しないが、恵沼の『了義灯』の中で引用され論破されているので、当時慈恩系が問題視した彼の『成唯識論』解釈を知ることができる。しかし現存する著作の一つである『解深密経疏』を見ると、現在我々が目にするものとは異なる『成唯識論』の引用が見いだされるのである。

それは取意によるものもあるがそうは思われないものもある。以下は、『解深密経疏』分別瑜伽品で説かれる第八地障に対して註釈する部分である。

釈曰。弁二第八地障一。謂所知障中俱生一分令三無相観不二任運起一。亦摂二二愚一。一於二無相一作二功用一愚。二於レ相自在愚。令下於二相中一不上自在一故。故唯識云。八於二無相中一作二加行一障。謂所知障中俱生一分令三無相観不二任運起一。前之五地有相観多無相観少。於二第六地一有相観少無相観多。第七地中純無相観雖二恆現行一而有二加行一。由三無相中有二加行一故。未レ能三任運現二相及土一。乃至広説。十地論云。於二無相一有レ行障。梁論云。於二無相一作二功用一無明。世親論云。無相作レ行。成唯識云。無相中作二加行一障。皆摂二一愚一。謂於二無相一作二功用一愚。准二唯識雖レ挙二一名一通摂二二愚一。謂於二無相一作二功用一愚・於レ相自在愚。（大日本続蔵経1, 34, 466右下）

ここで円測は、第八地障は、『十地論』『摂大乗論』『成唯識論』において「於二無相一作二功用一愚」という意味の一つの名称しか説かれていないが、『成唯識論』に准ずれば、これに「於レ相自在愚」を加えて二種類の愚を摂することを彼自身の解釈として述べている。ここで問題なのは、『成唯識論』巻九の原文では二種の愚がその名称で既に説かれているということ（仏教大系4, p.549）、そしてこれと同じ問題を取り上げる『解深密経疏』巻八の方では、右の例とは異なり『成唯識

論』の引用の中に二愚が含まれているのである（続蔵1, 35, 12左上）。こうしたことから円測の扱う『成唯識論』は、その資料的統一性に疑問を抱かざるをえない。

二

こうした原文との相違は『解深密経疏』では少なからず存在し、さらに『了義灯』が批判する円測説に関る例も見いだされるのである。以下に二つほど事例をあげて検討したい。

①『解深密経』の勝義諦相品では勝義諦の不可言説が説かれるが、これに関連して円測は、犢子部と有部と大乗の不可説思想を解説する。その内犢子部説の所では、

如三犢子部立二五法蔵一。謂三世無為及不可説法蔵。不可説法蔵即真我也。不可説為三三世無為及不可説一。成唯識論比量破云。汝説真我不レ可レ説為二是我非我一。不レ可レ説二為レ有為一無。猶如二空花一。（巻二、続蔵1, 34, 336左上）

と説かれる。

この犢子部批判は、現在の『成唯識論』では巻一の「与蘊非即非離」の我を批判する所に出てくるが、その表現は

後俱非我理亦不然。許五依レ蘊立非四即三離二蘊一応レ如二瓶等一非二実我一故。又既不レ可レ説二有為無為一。亦不レ可レ説二是我非我一。故彼所執実我不レ成。（大系1, pp. 189—192）

となっていて右の引用とは全く異なっている。

基の『述記』巻一末では

波計。非二常無常一。不レ可レ説二是有為無為一也。今者論主直以二我非我一而為レ例也。（大系1, p. 189）

と説かれており、これは『成唯識論』の原文の文脈上沿った註釈をしている様である。

しかし『了義灯』巻二本引用の円測説は、

且西明云。所汝説我応不可説是自我非他我。不可説有為無為故。猶如空華。（大系1, p. 191）

となっており、前の『解深密経疏』中の『成唯識論』に沿った形である。ここでは「是我非我」が「是自我非二他我一」に、「為レ有為レ無」が「有為無為」になっていることが違う程度であり、前者を単に語句解釈したものが後者である可能性がある。

②次に、『解深密経』分別瑜伽品の、止観の所縁の差別を述べる部分に対する『解深密経疏』の説をあげたい。

ここでは、無漏心が影像を変ずるのかどうかという問題が提起され、その説明のために、『成唯識論』巻九の、無分別智と後得智の見分相分の有無を論ずる箇所が引用されている。

有義此智二分俱無。説レ無二所取能取相一故。

有義此智相見俱有。帯二波相一起名レ縁レ彼故。若無二彼相一名レ縁レ彼者応三色等智名二声等智一。若無二見分一応レ不能縁一。寧可レ説為二縁一真如一智一。勿真如性亦名二能縁一故。応レ許三除レ此定有二見分一。

有義此智見有相無。説二無レ相取不レ取レ相故。雖レ有二見分一而無分別説レ非二能取一。非二取全無一。雖レ無二相分一而可レ説下此帯二如相一起上。不レ離レ如故。如下自証分縁二見分一時不レ変而縁上此亦応レ爾。変而縁者便非親証一。如後得智応レ有二分別一故。応レ許二此有レ見無レ相。（巻六、続蔵1, 34, 421左下-422右下）

以上は無分別智に関する部分までを抜き出したものだが、ここでは相見俱無・相見俱有・見有相無の三つの有義説が説かれている。

ここで取り上げたいのは、二番目の相見俱有説の最後の部分の「応レ許三除レ此定有二見分一」が、『成唯識論』の原文では「応レ許三此定有二見分一」になっていることである（大系 4, p. 435）。

ただ法成のチベット訳では原文と一致する（北京版vol. 235, 107b⁴）。だが「除レ此」というかなり表現はかなり意味を有するものであるためここは漢文資料に従い問題点としたい。

では「除レ此」と「此」の相違と円測説・慈恩説との関係はどうであろうか。

今は特に見分相分の問題を扱っており、又無分別智は真見道で唯識性を証するものであるから（『成唯識論』巻九、大系 4, p. 457）、唯識性、唯識真如を考える必要があるだろう。

唯識真如は『成唯識論』巻八に

七真如者……三唯識真如。謂染浄法唯識実性。……此七実性円成実摂。根本後得二智境故。随レ相摂者……余四（含唯識真如）皆是円成実摂。（大系4, p. 317）

とあり、円測は『成唯識論』の唯識真如に唯識性と観智との二義があると述べている。

若依二仏地論等一唯識之性名二唯識性一。若依二成唯識論一有二其二義一。一同二仏地一。更有二一釈一。於二一切行一唯識観智。故唯識云。随レ相説者円成実摂。（巻六、続蔵1, 34, 441左下-442右下）

しかし円測の観智説は、『了義灯』巻六末において次の様に批判される。

本疏云。見二識真如一便能知レ此。意説二所観如一。要集云。有釈（円測釈）云。三蔵解云。或用二観智一名為二真如一。不レ爾便与二後文一相違。染浄唯識応レ通三性一。此意若説二所観如一遍二三性一故応レ通二三性一。今謂本釈為レ正。……就二所観性一即唯成実。約二詮顕一可レ通二三性一。論云二随相一不レ障レ通レ余。（大系4, p. 318）

恵沼はまず、『述起』の「見二識真如一便能知二此染浄心等一」（大系4, p. 317）により唯識真如を所観の染浄心等の如と解釈し、これに対して『要集』引用の円測説が能観の智と理解していたことをあげて批判する。彼は最後に、これは所観の性について円成実性であり、そして右の『成唯識論』中の「随相」について、詮顕の相に随えば三性に通じることを障らないと解釈している。

円測の観智説は、所観が三性に遍ずる点が「染浄唯識応レ

通二三性一」と説かれるのであるから円成実性なる唯識真如は所観でありえない、という解釈によるものらしい。前述の通り彼は唯識真如を唯識性と観智との二義によって解したが、それを染浄唯識とはしていない様である。

ともかく以上から、恵沼説では唯識真如は三性に通じる詮顕相をさまたげないとし、円測説では唯識真如における円成実性の相を説くことが違う点だとわかる。よって彼らの説の相違は性相関係の捉え方による様である。

三つの有義説の内三番目の見有相無説は、『解深密経疏』で護法説だとされている（続蔵1, 34, 422右上）。又『述記』でも、『成唯識論』中の複数の有義説は、護法の釈にすでにあるものや理教広く説かれる場合などは後説が正説であるといい（大系1, p. 152）、これが護法正義であることはまず事実であろう。しかしこの説は「無レ相取不レ取レ相」を根拠とするものであるが、『述記』『枢要』『演秘』では、『瑜伽論』巻七三の無相取の難が取り上げられ、特に『枢要』は、相見俱有の側から疑問をなげかけることに終始している。慈恩系では見有相無説が護法説だと知りつつ相見俱有的な見解をいだいていた可能性もある。

しかし『解深密経』疏が引用する「除レ此定有二見分一」とする方は、真如の問題を除いて見分があると解釈され、「寧可下説為中縁二真如一智上。勿真如性亦名二能縁一故。応レ許三除レ此定有二見分一」をこの第二説に挿入された批判の文として読まざるをえない。円測は、相の円成実性なることから、唯識真如を所観でなく能観の智と解したが、これは相が現じないことであろう。よって円測説は相見俱有への批判及び見有相無説と特に矛盾しないと思われる。

紙幅の都合上、この問題に関しては唯識真如をめぐる問題点をあげるにとどめ、詳細な検討は別の機会に行いたい。

以上、円測の『解深密経疏』に引用される『成唯識論』に原文と異なる字句が見いだされ、それが慈恩系思想との相違に結びつく可能性があることを二三の例によって検討した。原文と異なる理由としては、円測自身の不注意あるいは意図的な訂正、何らかの資料からの孫引き等いろいろ考えられるがまだわからない。仮に現在のものと異なる『成唯識論』を円測が用いていたとすれば、基の意見に従って糅訳されたという『成唯識論』の成立問題にも関係してくるであろう。

〈キーワード〉円測、解深密経疏、成唯識論

（東洋大学大学院）